

江源氏鑑

四下

7北  
128  
T(4)

210  
72  
Vol 5

部	部
番号	番号
年月	年月
赤根中學校蔵	

寄

寄	贈
明治廿貳年以降本校卒業生三百十八名	
大正	七年
	六月
	八日

江源武鑑卷第四下

天文十八年

正月

朔日ヨリ至十五日作法例年ノコトニ

其目雲州ノ正統居子國久宰人ニテ江州ニ

來ル屋形甚惠三五フノ國久ハ雲州ノ元

祖佐木五郎隱岐守義清ヨリ十三代ノ嫡

領タリ屋形ノ族ナリ

二月

江源武鑑記

二日大雪三尺余近年無之上云

六日屋形上洛將軍家依不例ナリ定頼ノ御方依病氣上京ナレ彼息義賢ハ上洛

十九日信乃國ヨリ白馬五足アルヲ將軍家ニ獻ス今日江州高宮ニツク

廿四日濃州ノ土岐江州ニ來王ヲ定頼ノ御息女嫁シ玉ヒテ今度初テナリ五日箕作ノ

館天逗留ナリ

三月 春景四下



三日佐々木宮祭礼淺井下野守祐政カ家人

三田權内ト云者ト京極家ノ者ニ落合右近

上云者兩人神人刑部大夫實高カ通ルニ行

當テ大キニ戰フ依之祭礼申剋ニ出御

四月屋形昨日ノ喧嘩進藤山城守ヲ以テ糾

明シテ雙方今日切腹ス神人ヲハ召籠王ヲ

十五日江東君カ畠ヨリ白銀ヲ堀出ス今日

坂田兵内左衛門方ヨリ言上ス則兵内左衛

門ヲ金山ノ奉行ニ付玉フ是ヨリ江州ニテ

初テ金ヲ堀ル  
廿九日馬淵丹後守實冬卒ス行年五十七彼  
息與右門三所領等可給ニ二男父愛子ユヘニ  
與藤次ニ讓狀ヲ與フ依之言上ス屋形總領  
曰タトヒ配分ナシトテモ一家ノ嫡ナリ其  
上繼母ノ愛子ハ當腹ナレハ父丹後守時ノ  
愛ニシホレテナリトテ半分ツ、兩人ニ下給フ  
三田四月十六日昔ノ京跡東ノ昔ニ祭合ハ成  
五日駿州今川義元ヨリ使節アリ意旨ハ今

年上洛スヘシ御領國中無異義之様ニトノ  
義ナリ屋形聞召シ上洛ノ事叶ハシキ旨ノ  
返事ナリ今川ハ近年尾州ノ織田ト弓矢ヲ  
取カワシ其上織田ヘハ數度加勢ヲ江州ヨ  
リ遣シ至フテ其志フカシ今川家何ノ志ニ  
カ今及此使節尚重テ可記

十九日大雨午ヨリ子ニ及フ近年ニナシ

五月

朔日尾州ノ織田上総介信長ヨリ使節アリ

今年今川義元上洛せんとす尾州三州人共  
カイ川ニ出張シ彼ヲ取んとす味方勢少シ  
江州旗頭ノ内五頭ホト加勢トシテ下玉フ  
ヘキ人ヨシ屋形諾シ玉フ其左右ニ隨ヒテ  
何時モ可越ノヨシナリ  
五日佐々木祭礼如例年今日伊庭入道道全  
率ス八十三  
九月近年遠國兵乱ノ義ニ依テ將軍家守護  
片シテ蒲生忠三郎氏時ヲ京都へ上世玉フ

六角ノ館ニ住シ將軍家ヲ可守護ノヨシヲ仰  
下ス

六月

四日午刻地震

五日申刻ヨリ酉刻ニ至テ大風堅田浮目堂  
倒湖ニ入此時惠心僧都作ノ千躰佛二十三  
躰海ニ入紛失ス依之浦々改ノ義有テ八躰  
出ル  
廿二日箕浦ノ城天火ニテ燒ク本丸計

六月七月 赤坂天火ニテ熱人本城  
疫病ハヤリテ五畿内ニテ人多ク死ス江州  
ノ内ニテ八千人ニ及フ依之永原ノ上ニ一  
神ヲ祭号ニ疫神官  
十五日江州幸津川ノ宮鳴動ス翌日六月堂  
關東ニテ祇園ヲトリト云事ヲスルノヨシ  
ナリ其外武州忍ノ城主成田刑部少輔氏國  
雷ノタメニトラル、ノヨシナリ  
六月八月 赤坂天火ニテ熱人本城

尾州熱田ノ宮自將軍家織田備後守信秀ニ  
仰造營アリ

廿五日越前國織田大明神ノ宮ニ三面一躰  
ノ龜アリ將軍家ヨリ京都ニ召上ス

九月

十日江北小谷ノ城普請ノ義今日屋形ヨリ  
淺井祐政ニ仰下ス

十九日美乃國立正寺ヨリ白熊ヲ將軍家ニ

獻ル大キ井小馬ノコトク彼頭ニ金ノ札アリ

兼久元正月十日土岐太郎光方捕之同月廿九日山ニハナツト云文字ヲカク希代ノ事ナリトテ皇家へ上ル後ニ又自將軍家岩倉ノ山ニハナナス  
廿六日山科ノ里自細川家大石ノ六地藏ヲ作り今日供養ス近國ノ民群集ス午刻ニ俄ニ天曇テ雷落テ彼地藏一時ニ雷ノ夕メニ碎ケヌ

十月 信長將軍家岩倉田浦邊平家

八日今日亥子ニ當ル亥刻如例年將軍家出御有テ在洛ノ面々ニ赤白ノ餅ヲ以テ與フ畠山但馬守ト佐野右京權大夫ト營中ニテ口論有テ及喧嘩畠山手負妙心寺ニ入ル佐野當坐ニ死ス兩家下人四十余人討死ス京中大キニサワク  
廿一日江州桑實寺ノ本尊ノ頭ヨリ光アリ人群ヲナス廿八日ニ至ル  
廿九日三井寺ノ極樂院ノ住僧日惠ト云僧

俄ニ物ニクルヒ出テ我ニ智證大師ノ化移  
シテ法ヲ説クトテ阿字ノ文ヲ説法ス  
十一月 桑原時人本尊ノ説法ノ  
四日 定頼ノ館ヨリ光物出馬 渚カ家ノ上ニ  
落テ失又 桑原時人四十餘人持テ桑原京  
十一日 上原江兵衛尉事ノ子細有テ屋形自  
殺ス 桑原時人ノ弟 桑原時人ノ弟 桑原時人ノ弟  
廿七日 奥州會津盛隆ヨリ使節アリ屋形對  
面ス會津家ヨリ國ノ名物トテ染絹百匹ヲ

送ル使節一書ヲ屋形ニ進獻シテ曰ク屋形  
ノ一族ヲ一人奥州ニ下ス事ヲ請フ屋形不  
應委細ノ意旨不知不及記

十二月

十四日 江州ノ下地頭馬場左近ニ後藤但馬  
守カ娘ヲ嫁ス彼兩人不和ニ依テ屋形此義  
ヲ仰下ス

十六日 推知苦院道三江東ニ來テ屋形ニ推  
豚ト云事ヲ傳フ軍法入事ナリ屋形旗頭等



ニ又傳フ

口傳有事也

廿九日片相權内高輝二高嶋郡ノ内中村庄  
給ル此人年來忠功ノ義ニヨツテナリ屋形  
ノ近習ナリ

淡路國ノ意旨不詳不取信  
ノ一説ノ一人ノ説  
後ハ外説一書ニ載ルニ  
...

### 天文十九年

正月

元日大雪二日大風三日曇ル四日雷鳴五日  
地震辰刻江州ノ易者占トシテ曰甚凶年ナ  
リト朔日ヨリ十五日ニ至テ如例年  
十八日京極家ノ館へ屋形并伯父定頼息義  
賢御移リ八幡山ノ義昌依病氣彼館ニ不入  
屋形三日ノ逗留彼館ニテ十五番ノ的アリ  
廿五日屋形上洛ス旗頭ノ内六人供奉ス翌

時 御一門上洛ス

二月八日

五日屋形江東ニ歸城ス

十四日三好左馬頭晴秀卒ス号大泉院

廿四日山門ノ勸妙坊昌尊法印公方ノ營中

入テ自害ス末寺ノ爭論ニ依テナリ

六日三日二日大風三日曇山四日雷期五日

三日佐々木御社祭礼如例年今日竹生嶋ノ

小嶋ヨリ繩ヲ本嶋ヘ張ル由來多事ナリ昔

目ヨリ傳來自將軍家銅ニテ繩ヲ調テ今年

初テ張渡ス三月目ニ兩方切テ海ニ入甚不

吉ナリ

十五日屋形ノ前ニテ浅井下野守祐政八天

狗法ヲ仕祐政ハ山門大泉院ノ弟子ニテ十

三年彼法ヲ習フ依テ屋形望玉フ

四月

九日將軍家ノ真儒ニ山形道通ト云儒者江

東ニ來テ調屋形或夜道通ニ問フ人ヲモト

クト云詞古來有事カ道通カ曰久有万葉  
痛醜賢良ストテ酒不飲人ヲ熬不見カモ似ル  
ト有之ト答フ此外種々ノ問答アリ

廿一日豊後國大野郡ヨリ頭八人ニテ足手  
胴共ニ魚ニテウロコアル物ヲ將軍家ニ獻  
ス其名ヲ不知人魚カト云人多人魚ハ是ニ  
テナシト云鳴聲ハ麻ノコトニ十日計シテ死ス

五月

四日未剋前將軍義晴公他界春秋四十歲同

日ノ酉剋ニ移等持寺細川晴元先馳後ニ屋  
形義實

五日ノ未剋ニ御葬礼アリ當將軍義輝公等  
持寺ニ移リ至テ義實將軍ノ御連枝ヲ誘ヒ  
葬礼ノ義式ヲ作ス次第略之

勅使三條大納言贈号万松院殿委重可記

義晴公去月廿日病氣極ルト知テカ江州屋

形ヲ當將軍家ノ後見トシ十八箇條ノ御遺

狀ヲ屋形工渡シ至テ屋形ハ當將軍義輝公

御姉ミヤノ聳タテナリ仍テ天下ノ後見ニ成玉ナリフ色  
々ノ義アリ共多キニ依テ不記

十日今日万松院殿ノ一七日於等持寺御用  
アリ次第委不記

十一日今日ヨリ万部ノ妙典アリ

廿二日國々ノ諸侯シヨクエ御遺物トシテ太刀一  
腰ヨウツ、又下シ給ル奉行上野晴成ハルナリ叔野高宗タカムネ

等ナリ江州へハ大原實盛ノ御太刀山ノ上

日云御鎧甲共ニ

六月

十二日屋形ノ御前江州ニ歸城

十九日屋形ノ御前比良山ニ御父万松院殿

ノ寺ヲ建立シ玉フ後藤但馬守奉行寺号万

松寺自屋形志賀郡和介ノ里ヲ彼寺領ニヨス

七月

七日ヨリ十五日ニ至テ屋形ノ御前ヨリ江

州ノ氏寺ニテ千部ノ妙典アリ義晴公ノ御

用ナリ

廿五日大原伊豫守卒ス行年六十三  
廿七日ノ夜京大ニサワク事アリ故ハ細川  
家ノ家人十三好家ノ家人十二條油小路下  
ル町ニテ喧嘩シテ雙方手負多ク後ニ八兩  
家ノ者共聞カケニ集テ二條ヨリ一條ニテ  
ノ間ヲ上下馳違テ戰フ將軍ノ御所ニ屋形  
義實有テ此ヨシヲ聞テ江州旗頭ノ内山崎  
池田小川進藤後藤ノ五頭ヲ出シ事ノ旨ヲ  
糾シ三好細川ノ兩家ヲ將軍ノ御所ニ招集

家人共ノ意旨ヲ聞届ケ洛中ノサワキヲ止  
ム翌日將軍家ノ御下知トシテ細川三好ノ  
兩家閉門ナリ尚重テ可記

八月末ノ夜細川三好ノ御下知トシテ  
二日辰刻ヨリ大洪水鴨川流水夥ク出東川  
原民屋二千余流ル江州所々ノ川水出田畠  
多損亡ス

十五日江州八幡ノ祭礼例年ヨリ彌増テ旗  
頭中トシテ騎馬ヲ出ス事八百騎ニ余ル

廿四日一條兼冬公江東ニ來王七多賀社ニ  
詣王フ觀音城ニ逗留屋形賞之

九月

十日青地紀伊守入道秀實卒ス六十九  
十九日黒田大學頭宗細ヲ日來近習タリシ  
ヲ屋形年來ノ武功ニ依テ津田城ヲ下シ王ヒ  
旗頭以內ニ入ル重テ下旨  
廿八日田上甲斐守實國ヲ六角ノ館ノ番頭  
ニ仰付ラル

十月

對馬國宗貞盛カ五代子孫貞秀朝鮮ニ渡テ  
今月西海ヨリ兵當論ト云軍書ヲ將軍家ニ  
獻ス  
十一月諸國山々崩ル昔日ヲ尋ルニ永和三  
年八月廿日山ノ崩ル事アリ日本神武元ヨ  
リ今年ニ至テ山ノ崩ル、事兩度  
十九日大雹降ル大サ如栗  
廿五日地震申剋

十一月

四日江州安國寺依被倒造營ノ義ヲ京極武藏守高秀ニ仰付ラル

右ハ曆應二年諸國ニ仰テ國々ニ建立安國寺然ルヨリ此方國々ニアリ

廿日午刻泥降ル古來モ有之ト云傳ル  
今日十二月

五日將軍家諸國人守護ニ仰付テ四十町ヲ一里ト定驗シニ大塚ヲツクヘキヨシヲ仰

下ス五畿七道ニ奉行ヲ下ス

十四日大津町五十町焼失ス

十九日澤田兵庫頭宗忠ニ今堅田ノ城ヲ下

シ至フ此兵庫頭ハ元祖屋形ノ族ナリ仍テ

カクノユトキカ

廿二日吉田出雲守重高ニ屋形ヨリ諱字ヲ

至ハル仍テ号實重加之三目結ヲ下シ至フ

此實重元來屋形ノ族ナリシカ江州ニテ予

法家ナリ依之屋形幼少ヨリ師トシ至フ初ハ

吉田助右衛門尉ト号セシヲ去年受領仰下  
シテ父吉田出雲守重政カ受領名ヲ付玉フ  
當家代々ノ旗頭タリ其上屋形ヨリ八代ノ  
先六角蒲經公ノ時ニ吉田出雲守重賢ヲ馬  
ヲ天下ニアラワシ後ニ入道シテ道寶ト号  
ス其時代七人ノ旗頭ニテ江州ニテ弓馬ノ  
道ニ達シタリ道寶ト云名ハ六角蒲經公ナ  
ツケ玉フトナリ弓馬ノ道ノ寶也トテ如此  
代々忠功ノ家ナリ仍テ今屋形賞玉フトナリ

廿六日屋形近習二十一人ニ領知ヲ下與フ  
廿七日屋形上洛天下ノ後見ニテヲワシケ  
ルニ仍テ越年ノヨシナリ

五員

天文十一年...



日御一門上洛ス  
二月八日  
五日屋形江東ニ歸城ス  
十四日三好左馬頭晴秀卒ス号大泉院  
廿四日山門ノ勸妙坊昌尊法印公方ノ營中  
入テ自害ス未寺ノ爭論ニ依テナリ  
六日三月二日大風三日曇山四日雷五日  
三日佐々木御社祭礼如例年今日竹生嶋ノ  
小嶋ヨリ繩ヲ本嶋ヘ張ル由來多事ナリ昔

目ヨリ傳來自將軍家銅ニテ繩ヲ調テ今年  
初テ張渡ス三月目ニ兩方切テ海ニ入甚不  
吉ナリ  
十五日屋形ノ前ニテ浅井下野守祐政八天  
狗法ヲ仕祐政ハ山門大泉院ノ弟子ニテ十  
三年彼法ヲ習フ依テ屋形望玉フ  
四月  
九日將軍家ノ真儒ニ山形道通ト云儒者江  
東ニ來テ謁屋形或夜道通ニ問フ人ヲモト

クト云 詞古來有事カ道通カ曰ク有万葉  
痛醜賢良ストテ酒不飲人ヲ熬不見カモ似ル  
ト有之ト答フ此外種々ノ問答アリ

廿一日豊後國大野郡ヨリ頭八人ニテ足手  
胴共ニ魚ニテウロコアル物ヲ將軍家ニ獻  
ス其名ヲ不知人魚カト云人多入魚ハ是ニ  
テナシト云鳴聲ハ麻ノコトニ十日計シテ死ス

五月

四日未剋前將軍義晴公他界春秋四十歳同

日ノ酉剋ニ移等持寺細川晴元先馳後ニ屋  
形義實

五日ノ未剋ニ御葬礼アリ當將軍義輝公等  
持寺ニ移リ至フ義實將軍ノ御連枝ヲ誘ヒ  
葬礼ノ義式ヲ作ス次第略之

勅使三條大納言贈号万松院殿委重可記

義晴公去月廿日病氣極ルト知テカ江州屋

形ヲ當將軍家ノ後見トニ十八箇條ノ御遺

狀ヲ屋形工渡シ至フ屋形ハ當將軍義輝公

御姉ミツノ駕カナリ仍テ天下ノ後見ニ成玉ナリフ色  
今ノ義アリ共多キニ依テ不記

十日今日万松院殿ノ一七日於等持寺御ミ居  
アリ次第委不記

十一日今日ヨリ万部ノ妙典アリ

廿二日國々ノ諸侯エ御遺物トシテ太刀一

腰ヨコツ、ヲ下シ給ル奉行上野晴成叔野高宗

等ナリ江州ヘハ大原實盛ノ御太刀山ノ上

日云御鎧甲共ニ

六月

十二日屋形ノ御前江州ニ歸城

十九日屋形ノ御前比良山ニ御父万松院殿

ノ寺ヲ建立シ玉フ後藤但馬守奉行寺号万

松寺自屋形志賀郡和介ノ里ヲ彼寺領ニヨス

七月

七日ヨリ十五日ニ至テ屋形ノ御前ヨリ江

州ノ氏寺ニテ千部ノ妙典アリ義晴公ノ御

帛ナリ

廿五日大原伊豫守卒ス行年六十三

廿七日ノ夜京大ニサワク事アリ故ハ細川

家ノ家人ト三好家ノ家人ト二條油小路下

ル町ニテ喧嘩シテ雙方手負多ク後ニ八兩

家ノ者共聞カケニ集テ二條ヨリ一條ニテ

ノ間ヲ上下馳違テ戰フ將軍ノ御所ニ屋形

義實有テ此ヨシヲ聞テ江州旗頭ノ内山崎

池田小川進藤後藤ノ五頭ヲ出シ事ノ旨ヲ

糾シ三好細川ノ兩家ヲ將軍ノ御所ニ招集

家人共ノ意旨ヲ聞届ケ洛中ノサワキヲ止

△翌日將軍家ノ御下知トシテ細川三好ノ

兩家閉門ナリ尚重テ可記

八月

二日辰刻ヨリ大洪水鴨川流水夥ク出東川

原民屋二千余流ル江州所々ノ川水出田畠

多損亡ス

十五日江州八幡ノ祭礼例年ヨリ彌増テ旗

頭中トシテ騎馬ヲ出ス事八百騎ニ余ル

廿四日一條兼冬公江東ニ來玉七多賀社ニ  
詣玉フ觀音城ニ逗留屋形賞之

九月

十日青地紀伊守入道秀實卒ス六十九  
十九日黒田大學頭宗細ヲ日來近習タリシ  
ヲ屋形年來ノ武功ニ依テ津田城ヲ下シ玉ヒ  
旗頭ノ内ニ入ル  
廿八日田上甲斐守實國ヲ六角ノ館ノ番頭  
ニ仰付ラル

十月

對馬國宗貞盛カ五代子孫貞秀朝鮮ニ渡テ  
今月西海ヨリ兵當論ト云軍書ヲ將軍家ニ  
獻ス

十一月諸國山々崩ル昔日ヲ尋ルニ永和三  
年八月廿日山ノ崩ル事アリ日本神武元ヨ  
リ今年ニ至テ山ノ崩ル、事兩度

十九日大雹降ル大サ如栗  
廿五日地震申剋

大正十一年

四日江州安國寺依破倒造營ノ義ヲ京極武藏守高秀ニ仰付ラル

右ハ曆應二年諸國ニ仰テ國々ニ建立安國寺然ルヨリ此方國々ニアリ

廿日午刻泥降ル古來モ有之ト云傳ル  
今日十二月

五日將軍家諸國人守護ニ仰付テ四十町ヲ一里ト定驗シニ大塚ヲツクヘキヨシヲ仰

下ス五畿七道ニ奉行ヲ下ス

十四日大津町五十町焼失ス

十九日澤田兵庫頭宗忠ニ今堅田ノ城ヲ下

シ至フ此兵庫頭ハ元祖屋形ノ族ナリ仍テ

カクノユトキカ

廿二日吉田出雲守重高ニ屋形ヨリ諱字ヲ

至ハル仍テ号實重加之三日結ヲ下シ至フ

此實重元來屋形ノ族ナリシカ江州ニテ予

法家ナリ依之屋形幼少ヨリ師トシ至フ初ハ

吉田助右衛門尉ト号セシヲ去年受領仰下  
シテ父吉田出雲守重政カ受領名ヲ付玉フ  
當家代々ノ旗頭タリ其上屋形ヨリ八代人  
先六角蒲經公ノ時ニ吉田出雲守重賢弓馬  
ヲ天下ニアラワシ後ニ入道シテ道寶ト号  
ス其時代七人ノ旗頭ニテ江州ニテ弓馬ノ  
道ニ達シタリ道寶ト云名ハ六角蒲經公ナ  
ツケ玉フトナリ弓馬ノ道ノ寶也トテ如此  
代々忠功ノ家ナリ仍テ今屋形賞玉フトナリ

廿六日屋形近習二十一人ニ領知ヲ下與フ  
廿七日屋形上洛天下ノ後見ニテヲワシケ  
ルニ仍テ越年ノヨシナリ

天文二十一年...

生嶋入網渡シアリ  
十四日將軍家江東ニ下向シ觀音城ニ移リ  
十五日今日廿八日ニテ御滯坐屋形善ツクシ  
美ヲツクス  
十六日ニ將軍家多賀杜ニ杜參ス行烈等多  
ニ依テ不記  
十九日將軍家竹生嶋ニ詣ス渡海ノ躰言語  
ニ不<sup>ス</sup>及<sup>ス</sup>駭<sup>シ</sup>五<sup>キ</sup>幾<sup>キ</sup>内<sup>ノ</sup>大名大船ニテ將軍ノ  
御坐船ヲ真中ニシ津田ノ入江ヨリ至竹生

嶋渡ス

廿日將軍家竹生嶋ヨリ觀音城ヘカヘリ入  
玉フ

廿二日屋形將軍家ヲ爲賞武備百首ヲ始メ  
玉フ彼哥ノ題ハ儒學兵書ノ内要トスル所  
ノ語武具等ニ至ルマテヲ題ト定メ哥ノカ  
ラ其道ニヨクカナヒタルヲヨシトス寔其作  
者ニ依テヲカシキ哥多末世ノ物語ニ百首  
共ニ日記ノス



天文六年三月廿二日於江州觀音城武備  
塔百人一首和哥

判者ナシ其將ノ任心用武備

一以貫之 將軍義輝公

おしなぐりかひなく道のいつくさつたつてその海のあきりの月

明德至善 管領義實

善とて悪とてのしむべきなきをえりてあはれむい秀てん

中和誠 島山義忠

心がまじく強の中にあつたらふ邪と人のへそあはらむ

母不敬 箕作定頼

天地人の必事と知らしむとせうやまのふとせあらんぬあ

勸善懲惡 細川晴元

善とすしあをせしむし四のあ民もあはれせと保えん

時 茂田義統

政要の時一字に志くはるし時を志くぬへて將のよ

同 朝倉義景

戦の時一字に志くはるし時を志くぬへて將のよ

欽ツシム

長岡藤孝ナガノカフヂノタカ

つぎのうやぐまの人の心をせぬるやまのり

性善養氣セイセンヨウキ

京極高吉キョウゲタカヨシ

ひこすに性よりきて氣とそそく名利のきらみ切て捨スツ

無極而大極ブキョクニソテダイキョク

箕作義賢ヒササキノヨシカズ

大極のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

五常ゴコウ仁ニ

八幡山義昌ヤシノヤシ

仁のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

義ギ

大原高保オホハラタカホ

義のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

禮レイ

梅戸高實ウメドタカサチ

礼のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

智チ

仁木實長ニキサチナガ

智のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

信シン

木道具教キツクグモノノヨシ

信のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

五事ゴコウ道ミチ

末原實高ハハラサチタカ

乃ありて道のふらふのゆゑにそのつうきけすさつす道のりミチ

日天

種村高盛

天と云ふは陰陽を署時の制をせうん久軍と云ふ

日地

三好長俊

地と云ふはを迫陰易を獲に死せしを云ふあり

日將

朽木貞細

将と云ふは智仁勇嚴をねと一もくけく國を治す

日法

黒田重隆

法と云ふは曲制官道之制ありひとくけく據りあり

日主

吉田實重

主と云ふは

智と云ふは道ありと云ふは智もよく敵の強弱よく知る

日將

浅井祐政

將と云ふは敵の軍位と云ふは敵の智と云ふは名將

日天地

後藤頼秀

天地と云ふは

日法令

進藤秀盛

法令と云ふは敵の軍例と云ふは老と云ふはあつそ

日兵衆

青地細秀

兵衆と云ふは敵の軍力と云ふはぬきそと云ふは

士卒

高嶋高泰

つひに建物の勢は練不練との器にのりて我を擣

賞罰

三上定高

若くは建物のこととてぬ固く治すらんて乱らんて

實而備之

落合信高

敵の及強弱なりてくあるは建物のつとく治令とをせ

強而避之

蒲生氏隆

敵つとく建物のつとくに敵討つとく不意と打ち

怒而撓之

建部高兼

いさつと敵をいさつとわらふれはつとく建物のつとく

早而驕之

三井實忠

一とく敵をかうせ一とく友をけしていさつとくおとら

佚而勞之

池田實政

ゆかるといさつと付たりおと敵のつとくさつと付へ

不意

目加多綱清

敵味もさつと軍いさつとひつとく必物を付とるそく

敵國乱入

澤田忠頼

敵國にさつと入るそく報入もさつと國の民をさつとほえ

城責

多賀秀忠

責をせり比の利もよくて為ぬとあつて引て責は

依時行

木村成時

仍どはくの地よりてうりや也善て定ぬものとあつて

思治時乱

高宮信經

治世はしくもいふもあつていふはさうすはあつて

用賢則得自由

山岡秀冬

うくみよりいふもいふもいふもいふもいふもいふも

撰清濁

馬測定晴

すしにたりあつていふもいふもいふもいふもいふも

尊忠孝烈

榑崎氏國

忠孝のものともいひて奉ぬもいふもいふもいふも

明君之行

伊庭實晴

よりいふもいふもいふもいふもいふもいふも

亡將之行

赤田高持

欲少くいふもいふもいふもいふもいふもいふも

文武兩道

乾忠國

みと書と意備り方名扱へたれいふもいふもいふも

同

平井貞清

命在天

命在天

田中宗氏

儒釋道

儒釋道

坂田泰高

神妙

神妙

錦織冬成

慈悲

慈悲

和田貞繩

慈悲のありては人の心はなほつきの御くつそにあらん

仁勇

龜井永綱

仁勇の二に心深るるは血氣の勇かたえりてさあり

儉約

松下長則

さあるもの器おれくに法とてあひ國かうとせり

政要

村井高冬

政要の智信仁勇ありてよりとちらひにるる功あり

過不及

野村高勝

過不及の二の病ありては人の心はなほつきの御くつそにあらん

死生 戸田則細

會者之離生老必滅知ぬまじきふ下ろくひ物

尊早 尾子貞清

阿おのむれよ生れてふあまのあつとうし守道とあそる人

哥道 堀冬細

一あこのあふまじしこの業に非もあつこの志ふ非の道

遠慮 新庄氏忠

そとよりそとことろり知り時業あいつを笑あそるあ

堪忍 三雲氏之

堪忍の方に流るおるまはふとくげもあつたあ

思案 馬場頼資

そあのことじひのあうそまうそむのすくくはる

分別 津田信祐

ああそむいそりあ人し後あまはそいふんあ

諸藝 阿開長勝

道一のあめあある奥あまうくをてまうへ

行跡 箕浦貞教

よまんとあまのあはふんするあは利欲ありりり

學文

畑貞正

隨世

水原氏重

聖世

志賀文友

濁世

岡田良隆

謙

片桐實方

孝みりしるもどはちよんどの彦さしつてくんとさる人

ふしきさしつてもはせよあふあふさくさるふしき

孝愛の心さしつては代はきよのまきりあしすんじき

いらる世のちひふきとくうこてきよをのうけてはてはてはて

大ゆきあまのし原のゆくとるあまのし原のゆくとるあまのし原

横鑑

白井氏治

横やりのしつてくうくうくうくうくうくうくうくうくうくう

城取

横山頼高

城取のちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかた

船軍

小川長頼

船軍のちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかた

船固

宮部貞顯

舟のちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかたはちかた



軍用

鏡高親

軍用はつらつら池に米藪の邊にうけて求むる人

旗頭

山田蒲細

大物のいともむげり旗に仁勇ありし時休る人

軍奉行

山崎氏家

軍奉行は平りのきひたるありしとき

右筆

小野實胤

右筆はつらつらありしとき

學者

三宅實基

學者はつらつらありしとき

武具馬具得失

鯨江氏秀

武具馬具はつらつらありしとき

相圖旗

伊達氏豊

相圖旗はつらつらありしとき

再拜

大野木高盛

再拜はつらつらありしとき

晝夜相圖

栗津晴細

晝夜相圖はつらつらありしとき

太鼓

磯野定信

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

鐘

久徳氏三

くもなかりをりもさこゆら志のあに列て海る曉へじ

鯨波

大宇秀則

あら海けのんもえれけらけの夢と交のわけよんそ

野陣

加地盛隆

あわのいほ真鱗もろもろやと行あひ摸やりよ

方角日取

寺田清資

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

歸陣

石田氏成

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

力量早業

三田村氏光

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

山城

宇野親光

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

平城

上月氏賢

あまのつばは打ふりてうらたけうらたけや人のつとむひ羽ま

責具

多羅尾定武

せりくどは治せようくつ 羽之及ぬすの討めくは

忠罰

拍木資冬

右守符のさふ及あき園あめく人のおとぬおき

天下泰平

管領義實

いふしのあとの西代より海りあめししやもはさつひ

武備百首終

將軍家甚與ニ入玉フ則御所持アルヘシトテ

右ノ短尺共ヲ召上ラル

連衆者

- 畠山家
- 細川家
- 武田家
- 朝倉家
- 長岡家

右五人ノ外ハ皆江州ノ面々屋形族或ハ旗頭等

又ハ長臣兩執權其外城主ノ家礼等ナリ

其四目將軍家江州旗頭長臣ノ受領ナキ面

面ニ受領ヲナシ下玉フ三十七人ナリ其次第

不及記

其五日於伊庭馬揃アリ若輩ノ面々早的ア

其早的ト云事古來ナシ近年江州仕始タル

事一ナリ

廿六日將軍家百濟寺ニ詣玉ヲ

廿七日劔龍ト云太刀ヲ將軍家屋形ニ與之

屋形辭之子細ハ此太刀ハ將軍家ノ元祖

氏郷此太刀ヲ以テ足利ノ家ヲ與ニ治天下

依之屋形辭之

廿八日將軍家上洛ス畠山細川ノ兩家御先

ヲウツ同日屋形并伯父定賴息義賢大原高

保梅戸高實此外御一門ノ面々旗頭等將軍

ノ後陣ニ上洛ス

三月四月

十四日屋形并御一門歸城

十九日洪水後大風

廿五日建部左近信勝卒ス行年五十八

五月

朔日屋形上洛同御前是ハ今四日万松院殿

ノ御一回忌ニ當ル依之御兩所共ニ上洛ス

屋形ノ御前八万松院殿ノ嫡女ナリ

四日於等持寺去月ヨリ万部人妙典アリ万  
松院殿ノ御年忌ナリ  
五日佐々木社祭礼屋形在洛ニ依テ御曹司  
義秀社參  
廿一日子剋地震江州勢田ノ橋海ニ落流  
廿三日今日ヨリ勢田ノ橋普請アリ  
十四六月  
三日江北子削目代事ノ子細ニ依テ於觀音  
城屋形自之討之

十四日祇園會人駕輿丁ト細川晴元家人喧  
嘩ニ及ヒ神人多討ル依之神輿不渡十五日  
ニ神輿ヲ出シ奉ル細川家入妙心寺  
廿九日比良山江國寺燒亡ス

七月

九日於雲光寺屋形ノ父氏綱ノ御用アリ  
十五日六月江州浦々ノ殺生ヲ禁制ス屋形  
自之十八箇条ノ法ヲ旗頭ニ與フ  
廿三日卯剋箕浦ノ城燒失ス

十四日屋形伯父箕作定頼依病惱屋形移箕  
作城御一門并旗頭等入箕作城

八月

廿一日屋形祖父龍光院殿ノ三十三年忌ノ  
御用アリ來年八月廿一日三十三年ニ當ル  
然ルヲ屋形ノ後見定頼病氣ニ依テ今年被  
行之今十一日ヨリ今日至テ万部アリ經中  
ノ奉行淺井下野守祐政  
廿八日南禪寺ノ本堂ヨリ光物出テ賀茂杜

内ニ入ル甚不吉也ト云

九月

九日屋形ノ伯父定頼依病惱於佐々木宮護  
摩アリ

十五日藤堂角内左衛門尉孝光觀音城ニ被  
召テ屋形密事ヲ以テ尾陽ノ武衛ニ遣ス

十六日尾州ノ織田上野介信長同國海津ニ  
シテ同名大和守ト合戰大和守失利ノヨシ

ナリ

廿四日片桐土佐守氏行入道道法卒ス九十三  
十月大森寺合觀大森寺火焼  
十六日青山左近右衛門尉實負力館ヨリ火  
出テ同日酉刻ニテニ觀音城下ノ侍屋數五  
十二間寺社五箇所焼失ス  
廿五日山門於正覺院一七日大般若アリ屋  
形ノ伯父定頼ノ病氣祈禱ノ爲トテ大般若  
若讀誦ノ内種々ノ不吉多シ

納二十一月不吉云々

四日定頼ノ御方依<sub>ニ</sub>病氣今日自將軍家上使  
トシテ上野中務大輔江東來ル  
十日洛内六角ノ御館爲<sub>ニ</sub>天火烧甚不吉ノ兆  
ナリト云アヘリ  
十五日定頼御病氣ニ依テ伊勢住吉ノ兩社  
へ御代參トシテ後藤進藤ノ兩藤今日江東  
ヲ退キ彼社へ向フ  
右ノ定頼ト申ハ屋形ノ伯父ニテ殊ニ前屋  
形氏綱逝去ノ後ハ當屋形幼少ノ故定頼後

見トシテ數年ヲワシケレハ屋形實父ノコトク  
ニ思ヒ至フ人ナリ

廿四日比良山ノ於愛宕社毎日七座ノ護摩  
一七日アリ今日ヨリ初ル奉行等ニハ片桐  
民部少輔ナリ定頼御病氣ノ祈トナリ

十二月

二日細川晴元江東ニ來ル定頼病氣ノ見ニイ  
トナリ此外北陸道ノ面々遠キハ使節近キハ  
不殘江東ニ來ル定頼ノ年來信勇故ト云

五日箕作ト觀音城トノ間ニ毎日子剋ニ人  
ノ鳴聲數十人シテ一度鳴立ルヲトアリ其  
外ニモ和田山城ヨリ光物飛出テ箕作ト觀  
音城ニ入ル事毎夜ナリ

十五日定頼ノ息義賢於佐々木宮大神樂ヲ  
行玉フニ鈴ノ音ナシ不吉ナリ

江北江南江西ノ郷一門并旗頭不殘江東ニ  
集ル併國サカイノ面々番カハリヲ請テ所ヲ  
アケス奉行ノ面々出仕ヲセヌ國ヲミワル



近國ノ旗下ノ國々ハ八目加多青地兩人ヲ  
以カハレ城主共カワリヲ請テ江東ニ來ル  
此一日將軍家ヨリ箕作館へ上使アリ  
許在ル下益今暗ナシ不吉ナレハ  
臣征州家陣ハ總邊領外ハ木曾大將樂々

江源武鑑卷第四下終

長日細味由山嶽兵士殊難擧出  
大需整備十人立一敷撫在ハ  
正有其動斗贈音其入間未其具



47

